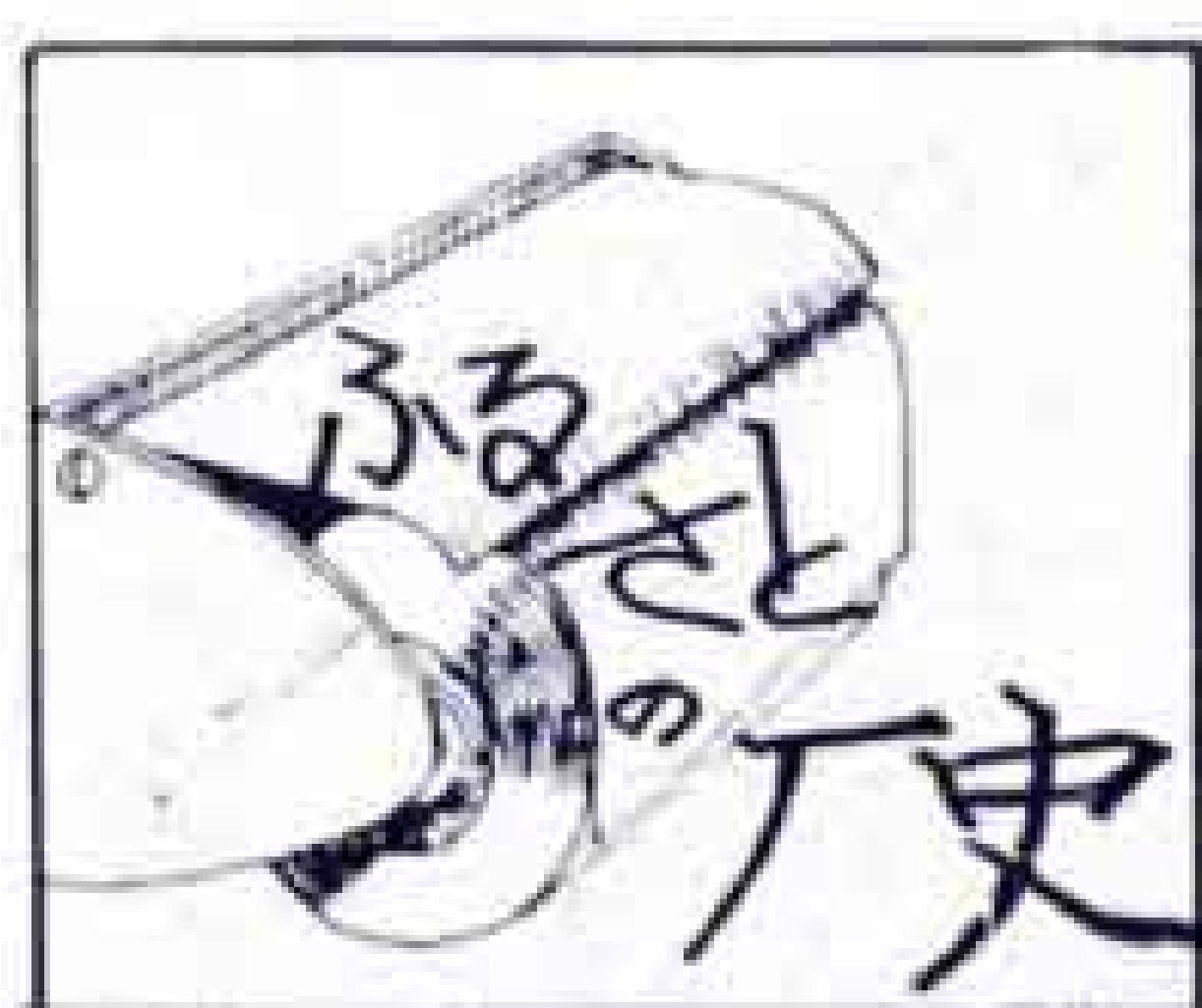




# ふじ市の製紙

⑤

## 昭和の製紙業



今年(昭和52年)は、製紙業はこの50年間どんなふう(ように)に発展してきたのでしょうか。

大正から昭和に移っても、不景気は続きました。新しい工場ができる一方、仕事を休んだり、つぶれる工場もあつたり……。こんなことのくり返しでした。

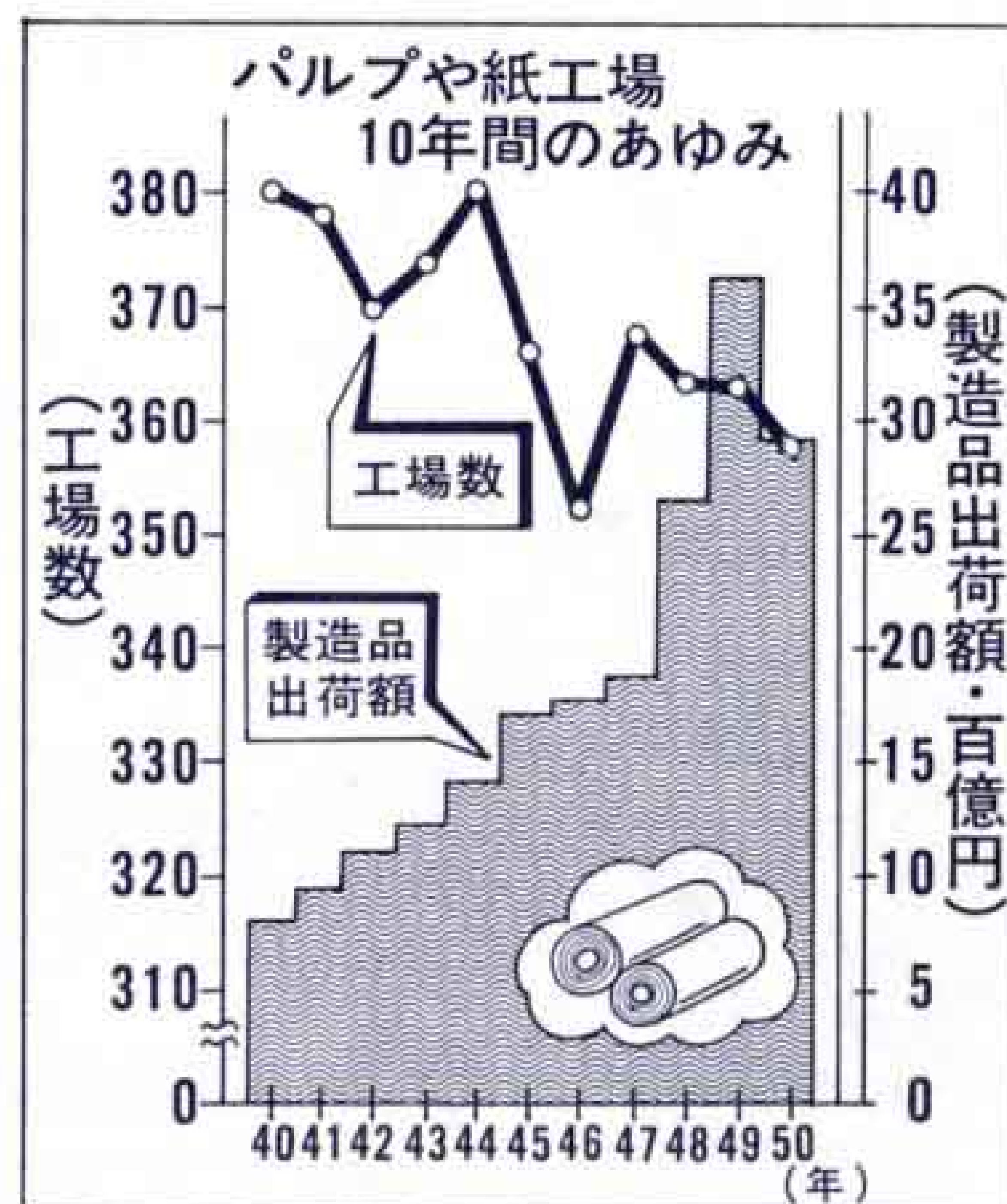
斉藤知一郎さんが昭和製紙を作つたのは、昭和2年のことです。昭和

13年、この昭和製紙は大正工業や岳陽製紙と一つになって大昭和製紙として誕生しました。

昭和16年12月、第2次世界大戦に突入。戦争がだんだんはげしくなると、製紙工場は戦争に必要な火薬や飛行機の部品を作る工場に変わりました。このため、紙の生産量はいままでの7分の1くらいに下がりました

昭和20年、日本は負けて戦争が終わると、吉原地区の製紙工場はものすごい勢いでふたたび生産をはじめました。仙貨紙(せんかし)ブームは、このころです。紙は非常に不足していましたから、紙質がもろく、ざらざらした仙貨紙でもとぶように売れたので

す。  
昭和の50年間、製紙工場はなんども景気のよいときや不景気を経験しました。つぶれてしまった工場も少なくありませんでしたが、なんとか切りぬけ、今では日本一の紙の産



地といわれるまでに発展してきました。  
現在、工場の数は360、製品を作つて売つたお金は2995億6900万円、パルプや紙産業は、富士市の工業全体の40%を占めています。

	パルプ、紙 17,245人		40パーセントの人は パルプや紙工場 働いています (50年工業統計調べ)
	化学工業 4,796人		
	金属製品 3,039人		
	一般機械 7,766人		
	輸送用機械 7,699人		

## 「人権作文」で2人が優秀賞

静岡地方法務局と静岡県人権擁護委員協議会は、中学生を対象に人権作文を募集しました。

静岡県内で428点の応募がありました。審査の結果吉原第3中学校3年生 加藤

純代さんの「ほんとうの人権尊重とは」と、2年生 篠田鉄也くんの「子供の権利」が優秀賞に、吉原東中学校3年生 吉村和子さんの「人権について」が佳作に選ばれました。

### 吉原第3中学校

3年 加藤純代さん



2年 篠田鉄也 くん



私達は、空気にふくまれている酸素をすつて生きていますね。はきだすときは炭酸ガスで、これは、人間にはやくにたたないかすの空気です。

人が多ぜいいいて、しめきつたままの部屋は、かすの

よごれた空気をすうと

—15—

空気ていつぱいになります。また、ひばちやガスストーブ、石油ストーブがある部屋も、かすの空気でよごれてきます。火が燃えるときにも、たくさん酸素が必要だからです。

酸素の少ない、よごれた空気をすつとすつていると頭がいたくなります。

人が多ぜいいいたり、ストーブを使つていいる部屋は、ときどき窓をあけ、きれいな空気と入れかえましょう。